

# 魯迅の曲筆と暴露

— 魯迅逝去三十周年を記念して —

川上久寿

魯迅の曲筆とはいふまでもなく、かれ自身があちこちで述べているように、晦涩な言葉（偽自由書前記）を用いた、まわりくどく、口ごもった、素直でない筆のまわしのことであり、「足枷のついた舞踏」と曹白あての手紙（1936年5月4日付）で書いてるような筆法のことである。つまり言論抑圧のもとにあって平明直截かつ詳細な口がきけずイソップの言葉、奴隸の言葉によった筆づかいで、これが普通いうところの曲筆である。しかし、私は曲筆を広狭二義に解している。桎梏をつけたダンスとしての狭義のものと、それ以外に諷刺、逆説、反語、皮肉も含めた、とにかく素直でない、物事の委曲をつくして語らない筆法である。したがって、それは七首の一閃、忽ちにして敵を斃す態のものであって、頗る痛快であるが、反面、正確さを内包する簡潔さとはちがって、委曲をつくしえないがためにおこる誤解や混乱も予想せねばならない筆法のことである。

魯迅の曲筆になる文章は広狭両義をとわず名文が多い、そして迫力があって説得力に富んでいる。切迫した社会・政治情勢のもとにあって、しかもいつ何時おのが身にふりかかるかもしれない白色テロルの脅威の中において、多くの人々が気骨ある文章は今の世になしと歎いていたとき、魯迅が気骨ある文章を書きつづけられたのは曲筆の駆使によってである。曲筆こそ魯迅晩年の文章（雑文）の精髓といってよい。魯迅の雑文は「熱風」にはじまり「且介亭雑文末編」にいたるまで、悉く当時の社会・政治の緊迫した諸問題と固くむすびついている斗争の書である。その内容はすべて中国の当時の

政治情勢により規定されている。客観情勢の変化発展とともに魯迅が発表した雑文の問題、内容および発表した新聞雑誌などの性質も多岐にわたっている。たとえば主として国粹主義との戦いであった初期の雑文集「熱風」が「晨报副刊」や「新青年」のような合法的進歩的な新聞雑誌にのせられたのに対し、晩年のもの特に「且介亭雑文」になると、その主題は帝国主義の侵略、国民政府の売国性、国民政府のファシズム化、蔣介石およびその徒党が中国民族を裏切ってアメリカをご主人としたことにより中国人民を敵としたこと、この種内外のご主人の幫間となったインテリ文人、これらすべてに対する痛烈な批判と暴露、攻撃が中心となる。またこれに反して、国内における新らしき勢力の成長、ますます強まる中国紅軍とその革命根拠地の拡大、進歩的愛国的な社会の各階層が中国共産党の側についてゆき、国民党を見棄てたこと、以上が国民党と外国帝国主義の支配の下にあった上海にあって戦った魯迅雑文の基本的モチーフである。晩年の魯迅はきびしいというよりは滅茶苦茶な検閲下にある合法的出版物にはむろんのこと、非合法の新聞雑誌にも筆をとるようになった。魯迅は蔣介石が反革命の裏切りをしてから間もなく蔣介石政権の暴露をはじめている。それ以後の晩年の雑文には残酷な白色テロルの嵐の中にあってとぎすまされた曲筆が戦いの武器たる雑文の支柱となってゆくのである。だからそういう筆法を知りそれをよりよく理解するためには、魯迅にこういう筆法をしいて用いさせねばならなかった時代、社会の環境を知らねばならぬ。しかしここではその歴史的叙述は省略して、1930年以後国民党独裁による暗黒政治がその敵対者たる革命的文化界に対して加えた圧迫と白色テロルのありさまを記しておくにとどめる。

1930年に中国自由大同盟や中国左翼作家連盟がつくられてから後の弾圧はさらにむごいものとなったが、それには二つの方法があった。ひとつは書籍、新聞雑誌の発禁、作家の逮捕、書店の閉鎖であり、もうひとつはスパイやゴロツキを雇って破壊活動を行ない、或いは祖国と人民にそむいて身を売り渡した三文文士を組織して反革命の文学運動をおこすことである。魯迅の

言葉によれば、こういうことになる。「支配階級に属するいわゆる文学者は腐りきっていうところの芸術のための芸術もデカダンの作品すら書けなくなった。現在のところ左翼文学をおさえられるものは中傷、圧迫、拘禁、殺戮のほかないし、左翼作家に対立するものはゴロツキ、スパイ、走狗、死刑執行人しかいない。」「新聞、雑誌、単行本の発禁は革命的内容のものばかりでなく、赤表紙の本や作家がロシア人だというので行なわれた。こうしてセラフィモヴィチ、イワノフ、オグネフはむろんのこと、チェホフ、アンドレーエフのある種の小説すら禁止のリストにのせられた。」ソビエトのものはいうまでもない。H. Zur Mühlenの童話の翻訳も行なわれた。したがって出版されるものといえば算術の教科書か Mr. Cat と Miss Rose のおしゃべり位しか残らなかったのである。しかしそれもまた国民党の將軍を立腹させた。動物と植物に口がきけて、その上ミスターとかミスとかいう言葉で交際するなどとは人間の尊嚴を失墜させるものだというのである。新らしい本を出す出版社は閉鎖された。新規に開店したのもある。しかしそれは読者の眼を政治斗争からそらす文学であって、スチーヴンソンやオスカー・ワイルドの作品の原文対照による翻訳だけだった。他方ではもとの主人公や店員を追っばらって、こっそりと自分らのいいなりになる徒党に入れかえた。「この書店は走狗でいっぱいになり、いかめしい役所に早変わりした。役所というところは中国人の最も怖れるところであり、ひどく憎むところである。こんな書店へは暇をもてあましている走狗のほかには行くものはいないだろう。」(「暗黒中国の文学界の現状」・「二心集」) また進歩的出版社や映画会社の社長を脅すため何やらいう名の結社が企業家に損害をあたえるため破壊的な掠奪を行なった。そういうわけで、「上海の芸華映画会社はさんざんな破壊をうけた。よく訓練された一団が呼子によって襲いかかり、呼子で停止し、呼子により引き上げていった。帰りぎわには征伐に來た理由を記したビラを残していったが、それによると会社が共産党のため利用されたからだということだった。破壊は書店にもひろがった。大規模のばあいは集団してドッと踏

みこみ片っぱしから打ちこわしたが、小規模のときは何処からともなく石がとびこんで来てショウウィンドーの二百円もするガラスを粉碎したが、その理由はほかでもない、会社が共産党に利用されたということだった。」(「中国文壇上の幽霊」・「且介亭雜文」)

以上のほか 1933 年 11 月には「神州国光」,「光華」,「良友」の出版社や多くの映画館, 劇場が破壊されるし, 新聞の編集者には脅迫状が舞いこんだ。「出版社を襲うのが最も効果ある戦術になった。」, こう魯迅は政府の政策に対し自分の考えをしめくくっている。しかし「数塊の石だけでは不足の嫌いがあった。」と権力の危惧を指摘している。それで「国民党中央宣伝委員会は百四十九種の本を禁止したが, そのほとんどはよく売れる本だった。むろん禁止処分をうけたのは左翼作家のものが大部分であるが, 訳本も禁止をくらった。ゴーリキイ, ルナチャルスキイ……ひどいものになるとメーテルリンク, ソログループ, ストリンドベルクも禁止されたのである。」

出版界には恐慌がおきた。或るものは手持ちの本を提出して焼き捨てるし, 或るものは当局とかけあって本の一部でもいいから助けてもらおうとした。そこで将来のイザコザを避けるべく日本に範をとり, 予め検閲する方法をとることになったのである。「しかし, かれらが日本に範をとったのは誤りであった。日本ではむろん階級斗争を談ずるのは禁ぜられている。だが世界に階級斗争がないなどとはいっていない。ところが中国では世界にはいわゆる階級斗争なるものは存在せず, あるというのはマルクスの捏造にかかわるものである。したがって話すのも禁ずるのは真理を守るためである。」この皮肉は国民党のファシズムの暴露にとどまらず, すべて政治の権力を握っているものに共通な本質の暴露とみてもいい。こうして, 進歩的なものは国の内外の作品をとわず姿を消すことになった。政治の面においては絞首台に送られるものと送るものとの間の戦いは停止されるどころか, さらに激しさを増した。それと同じく文学の面においても進歩的文学者は戦いの武器たる筆をおくことなく, あらゆる方法をつくしてより強くより固くその陣営を結

集していった。そしてその先頭に立っていたのはいうまでもなく魯迅である。かれはこの文章の最後に 予言でもするようにこういっている。「しかし實際上文学界の戦線はいやがうえにもはっきりしてきた。偽瞞は長つづきしない、つづいて起るのはまたも新らしき血腥い戦斗であろう。」

以上が昨年 の魯迅をとりまいていた社会情勢、文学界のありさまだった。「暗黒中国の文学界の現状」と「中国文壇の幽霊」から適当にひいてみた。これだけの引用では雑であり、不足の感を免れないが、大体の様子はつかめるだろう。当時の時代、社会につき歴史的な敘述を省き、魯迅の原典から引いたのは、狭義の曲筆との比較対照を考えたからである。大体のところ晩年の魯迅が狭義の曲筆を多く用いたことは事実であるが、必ずしもすべてがそうとはいえない。現に「暗黒中国の文学界の現状」はアグネス・スメドレーの求めに応じアメリカの進歩的雑誌 *New Masses* に発表したもので、1931年のことである。「中国文壇上の幽霊」は *China to-day* (現代中国) の第一巻第五期にのせたもので、後に英文からドイツ語とフランス語に訳されて「国際文学」に掲載されたことが「且介亭雑文」の附記に示されている。いずれもファッション化した国民党を全世界に暴露するのを目的として歯に衣をきせず書いたものであるから、いわゆる狭義の曲筆は見あたらない。それに反して読者をして快哉を叫ばしめずにはおかない逆説と反語、皮肉にみちている。だから魯迅は晩年に多く狭義の曲筆を用いているとはいっても実際は多種多様で、あるものは偽装され隠蔽されているが、あるものは公然として何の忌憚もなく書かれているものさえある。これは魯迅を通読したものの誰しも気づくことである。どうしてこういう現象があらわれているのか。それは魯迅が戦うために可能性としてあるすべてのものを戦いのために利用したことから来ている。魯迅は合法的出版物にだけ物を書いたのではない、日本、アメリカなどの雑誌にも書いたし、国内の非合法新聞雑誌にも書いた。また同じく合法的なものでも内外の政治情勢の変化により、或いは内外の世論の圧力などにより検閲のきびしさに多少の手心が加えられたことも

ある。それからまた検閲官の質の問題もあろう。増田渉先生宛魯迅の手紙によると、こういうのもある位である。「検査官の中に頗るモガが居ます。彼の女達は僕の文章をわからないで手を入れるから、やられるものは頗る気持がわるい。上手な勇士は一刀で致命的な処に中て敵を殺す。然るに彼の女達は小刀を持って脊中や尻などの皮膚にちくちく刺すので血が出て体裁もわるい、けれども刺されるものは中々たおれない、けれどもともかく気持がわるいから困ります。」(増田渉著、魯迅の印象、ミリオン・ブックス、大日本雄弁講談社、183頁。魯迅選集第13巻、岩波書店、187頁。)この種のモダンガールならば検閲も妙なところできびしくなったり緩かになったりもするだろう。役人や特高警察の無能な検閲官からモガそれに魂を売り渡したとはいいながら、検閲にかけては有能な犬の文学者もいたのだから検閲官のほうも多彩だったわけで、一貫して同程度のきびしさが維持されていたわけではない。以上のような点から検閲規準の不統一が生じたのではあるまいか。

国民党は自己を暴露し摘発するものにたいしては、あらゆる支配者がそうであるように手段をえらばず、その口を封じ筆をおらしめようとした。つまり小者が行なえば犯罪を構成するが、政治の権力者にとっては公然たるパテントとなる誹謗、中傷、買収、脅迫、検閲、拘禁、暴行、殺戮によったのである。魯迅は唐弢宛の書簡に書いている。「検閲官諸公が私の文章を削除するようになってから時久しい。かれらは私の名前を中国から駆逐しようと思っているわけですが、おっとどっこい、その仕事は頗る厄介です。」魯迅全集、第10巻、人民文学出版社、232頁)魯迅はこうした環境でたびたび「上り鏢鏢的跳舞」という言葉を使っている。曹白宛の手紙や増田先生宛にも「つまり私達は皆な桎梏をはめてダンスをやって居るのだ。」と書いている。(魯迅全集、第10巻、人民文学出版社、300頁、魯迅選集、第13巻、岩波書店、190頁)しかし、それでもかれを沈黙させることはできなかった。厳重な検閲の網の目をくぐりぬけるための手段のひとつとなったのが狭義の曲筆である。以下魯迅の曲筆による諷刺、逆説、反語などによる権力の暴露に焦

点において魯迅の雑文をみてみよう。

第一は国民党権力の暴露である。それを幾つかに分けてみてゆくが、そのひとつは検閲の暴露である。「准風月談」の前記と「花辺文学」の序言はこの点では出色の文章であり、いわゆる序とか前書きとかいうものを含むことはむろんであるが、それ以上に一個の雑文としても逸品である。魯迅は「准風月談」の前記で、申報の副刊の「自由談」欄の編集者が「国内の文豪に呼びかけて、今後ますます風月を談じていただこう」とまでなった「中華民国建国二十二年」の時勢を暗示し、「古暖簾の風月文豪を大張切りに狂喜せしめた」ことをあばき、金次第ではどこへでもころぶような、さもしい文学者の媚態をしめすため、かって「フェアプレイ論」で創造した狎の形象を再び用いて、「文学スパイにしかねない狎ころでさえ、その貴い尻尾をまきあげた」といっている。しかし魯迅はどんな題目にせよ、さまざまな観点から論じうるとして「風雲（時勢、社会情勢の動き）を談じうるものは風月をも談じうる。風月を談ぜよとあらば風月を談じましょう、依然として貴命に副いうるや否やは別として。」と戦斗的姿勢をとっている。魯迅はそれを「学びて時に之を習う」という試験問題を例にとって説明する。つまり古代のみを有難がっている遺少と人力車夫の書いた答案とではまるで違う。また兄弟でもその考えは根本からくい違っている、聖人の柳下恵は砂糖水を見て「老人に孝養をつくせる」と思うし、大泥棒の舎弟盗跖は「門のかんぬきをはずせる」と考える。同じく風月を談じても、「月白く風清し、この良夜を如何せん」の風雅さと「月黒くして殺人の夜、風高くして放火の天」の物騒さを対比しながら、「わが風月談もついに物騒な話になってしまったが、決して殺人放火を主張するわけではない。実のところ、「もっと風月を談ずる」を「国事を談ずる勿れ」と思いこむのは誤りである。」と例によって逆説を弄し、「国事を漫談」するのは一向に差支えない。「ただあくまでも「漫」でなければならぬ、矢や石が誰かの鼻にあたらなければすむ、いったい鼻というものは武器であり、また看板でもあるからだ。」この誰かはむろん狎ころ

犬のようにご主人に媚態を呈しながら視覚によらず嗅覚によって検閲官のソファーに坐っている犬の文学者のことであり、当時の複雑な環境下において直接名指しができないまま暗示にたよっているのである。「かれらは文壇の事情に精通しており純粹の官僚みたいにバカでもない。ちょっとした諷刺や一句の反語もかなり理解できた。それに、文学の筆で検閲するのは創作より面倒でない。」（「中国文壇上の幽霊」,「且介亭雜文」）こういうことでレーニンのいう「イソップの言葉」も無教養な警察の手先やバカな役人相手とちがってあまり有効でなかったわけである。しかし、悪魔の手にも光りの漏れるところがあり、法には抜け穴があるとおり、検閲の網の目にも逃れるところがある。検閲の目をかすめるため魯迅が用いた文体上の手法はどのようなものだったか。

「申報副刊」の「自由談」の編集者黎烈文が圧迫をうけてそのポストから締め出されてから以後、魯迅はもう書く義務がなくなったわけだが、「為了賭氣」で、手を変え品を変えては編集者を愚弄しはじめた。このばあい原文の「賭氣」であるが、これはどういう意味だろう。岩波版魯迅選集によると、「何しろ腹が立ったので」とある。ロシア語訳を見たら *из упрямства* 「固執僻から」とあった。どちらも正しいだろうが、「何糞！」「何を！」といった語気のものであろう。青木文庫の魯迅選集にはこの「花辺文学」序言はのっていない。とにかく魯迅は「……文体を変え、筆名も変え、原稿は人に写してもらい、投稿してもらった。新しい編集者は誰の筆になるものやら見分けがつかず、私のものは相変らず掲載されていた。私は活動範囲をひろげて、他の期刊にまで執筆するようにさえなったのである。」（「花辺文学」序言）魯迅はさらに書いている。「1934年と1935年は違う。（魯迅は1935年に「花辺文学」の序言を書いている——筆者）今年は「天皇漫語」（原文は「閑和皇帝」、日本の天皇裕仁のことを書いたもの、このため日本から抗議があったため、この文章をのせた雑誌は没収され、編集者も処罰された）事件で役所の書籍新聞検閲所が突如として行くえ不明となり、七人の検閲官がク



びになった。その時に新聞で削除された箇所も空白を残しておいてよいことになったようだ。」検閲の緩和された理由を魯迅は政治情勢のうちに見ている。つまり日本軍による侵略の脅威であり、またそれによってひき起された国内世論、言論の自由を求める声である。魯迅はさらに続けて奴隷の文章しか書けなかったことに憤りをこめていっている、「しかし当時は（つまり1934年——筆者）まるでひどかった。こういってもだめだし、ああいってもうまくない、のみならず削除の箇所を空白にしておくことは許されず、つづけなければならない、口をモグモグしたように曖昧で何を言っているやら分らぬといった責任は作者が負わねばならぬ。こうした明誅暗殺のもとで生きながらえ読者にまみえるものが奴隷の文章でなくて何であろうか？」官製思想でなければ無思想の文章しか存在しなかった当時の中国における魯迅は環境が悪化すればするほど沈黙と逃避とはまるで逆の方向へ進み、ますます多く雑文を書いたが、そのカギは次の文章によって明らかとなる。或る友人が慨嘆して、「新聞に投稿すると、まっさきに編集者が何本かの骨をぬく、つづいて編集長が骨をぬく、そして最後には検閲官が骨をぬく。それではいったい何が残るだろう？」魯迅はそれに忠告して、「あらかじめ幾らか骨をぬいておく、でないと残るべきものすら残らなくなる。」だから当時は思想性あるものは「削除の可能性が四回はあったことになる」と魯迅は書いている。そして更に国民党のテロ、検閲がいかに凄じかったかを生々と描き出し暴露するために、「現在は文天祥と方孝儒が或る人々からしきりと表彰されているのではないか。幸いかれらは宋明の人だった、もし現在に生きていたなら、その言行は誰にも知られはしないのだ。」とあって、国民党の弾圧が宋明の時代を凌ぐことを暗示しているのである。こんな所に魯迅雑文の曲筆のカギがある、序や後書きを軽くあしらってはいけない。この序ほどすばらしい序もあまりあるまい。しかし惜しいことに魯迅の検閲の暴露も体系的に組織された一本となることなしに終わったが、もし事情が許せば立派な「国民党検閲史」を書き残していたかもしれない。さらに魯迅はつづける、「だから官

許の骨のある文章のほか読者の読めるものは骨のない文章ばかりである。私は清朝に生れ、もともと奴隸の出身（異民族の清朝からみれば漢民族は奴隸である——筆者）であるから、二十五才以内の青年が生れながらにして中華民國の主人になっているのとは違う、しかしかれらは世間知らずだから、たまたま「その所以を忘れて」ゴツンと壁にぶつかるような仕儀になる。」共和国（？）に生れ育った青年は当然に言論の自由を充分に享受しうる権利をもつものと心得ているはずだから、かれら世故に長けていない青年に対する警告であろう。この「世間知らず」すなわち原文の「不經世故」は深い含蓄ある言葉である、同じく「忘其所以」も味が深い。表と裏、看板と中味、光と影の弁証法と同じように政治の行なわれている社会の本質、つまり国家権力の性質にかかわる問題を暗示しているのだ。「私の投稿目的は発表にあるからむろん骨を見せないようにする、したがって「花辺」（レースのこと、それよりギザギザを表わし、なお骨を暗示する——筆者）で装飾されているのは、きっと青年作家よりも多いただろう。だのに不思議にも削除をうけた箇所はかえって少ない。一年に三篇だけである、いま削除部分を全部補い例により黒点の印をつけておいた。「奏理斎夫人の事」の終りは申報新聞社の編集長、他の二編は検閲官が削除したものと私はみている。ここにはかれらの異った気持があらわれている。」ここには若い作家たちよりずっと多く書くことのできた理由が説明されている。つまり、思想を隠蔽する曲筆の手法を駆使し、中世と現代を対比することにより言論抑圧にかけては、歴代の専制王朝よりも現時の共和国の国民党のほうが遙かに上手であることを読者に訴えたとともに後進の若い作家たちにいかにして検閲の網の目をくぐるかを教えているのである。また魯迅が雑文集を一冊にまとめた時、その時々筆名をそのままのせ、検閲による削除部分はもと通りに復活して黒点をつけ、その所在を明らかにしたことは魯迅の書いたものを研究するばあい重要な手がかりとなる。削除箇所の復元によりまず第一に原形のまま読めること、第二に削除箇所を知りうること、第三に削除の手を加えたものが編集者か編集長

かそれとも検閲官であつたかがほぼわかる。第四に魯迅自身が自ら抜いた骨をも推測しうる、つまり四回にわたる削除の過程を知ることができるのである。「語句が多少の修正をうけ、禁句が若干削られていても意味のほうは充分つながるのは編集者の手になるものである。もしもでたらめに改削し文の脈絡も意味もお構いなしといったものは官製の文章である。」（「准風月談」前記）そこで前にも引いたように「秦理齋夫人の事」の終りは編集長が削除したが、他の二篇は検閲官が削除したことになる（「花辺文学」序言）。ここでいう他の二篇とは何か。「花辺文学」中削除をうけているのは、「秦理齋夫人の事」のほかには「過年」（日訳すれば「正月」）と「迎神和咬人」（「神を迎えることと人を咬むこと」）の二篇である。この後の二篇すなわち削除の結果欽定の文章と化したものを具体的にしらべてみよう。

……

正月中も休刊しない新聞上には、いろいろ感慨も載った。しかし、感慨のみである。結局、事実には勝てない。若干の英雄的な作家たちは、人を一年中発奮させ、悲憤させ、記念させた。だが、させただけだ。結局事実には勝てない。中国には哀しむべき記念があまりにも多い。これは例のことながら少なくとも沈黙すべきである。また喜ぶべき記念も少ないとはいえぬ。しかし「反動分子（南京政府に対して反動的なもので主として共産党を指す）が機に乗じて騒ぎをおこす」恐れがあるから、人々の氣勢も揚らない。

……（魯迅選集，第10巻，185頁，岩波書店）

このパラグラフで削除部分の原文は次のとおり、然而又怕有“反動分子乘機搗乱”，所以大家的高興也不能發揚。したがって翻訳は「反動分子が」としたほうがよいのではないか。空白が許されず、わけのわからぬ文章として続けるためにはこうすべきである。

人を一年中悲憤させ、労働させる英雄たちは、きまって自分では全く悲憤と労働を知らない人物である。實際上、悲憤するものや労働するものは、時々休息と娯楽を必要とする。古代エジプトの奴隸たちも、時には冷然と一笑することができた。これは一切を蔑視する笑いである。この笑いの意義を解しないものは、ただ主人と、自ら奴隸の生活に安んじ、労働が割に少なく、しかも悲憤を失ったところの奴隸だけである。

私は旧正月をしなくなってからもう二十三年になるが、こんどは三晩もつづけて爆竹を打ちあげ、隣の外国人をも「シーッ」といわせた。だがこれは爆竹と共に私の一年を通じてのせめてもの楽しさであった。(魯迅選集、第10巻、185頁、岩波書店)

この訳文には奴隸という言葉が三回出てくるが、原文では最初のは「奴隸」、後の二回のは「奴才」であるから、「エジプトの奴隸たち」は「エジプトの奴隸の生活に安んぜざる奴隸たち」としたほうが文学的ではないかもしれないが、魯迅の意に副うだろう。また「主人」という訳が出ているが、この原文は「主子」だからむしろ「ご主人」と敬することにより揶揄したならば「主子」の意味の味がでるのではないか。なぜなら奴隸には奴才が対するように主人には主子が対し、奴隸はその分に安んぜざるドレイ、奴才はその分に安んじてご主人に従順なドレイのことであり、主子は主人と異って軽蔑や憎しみの語気をもつ言葉だからである。もっともこの意見には反論があるかもしれない。たとえば「“民族主義文学”の任務と運命」などには「主子」といってもよいと思われるところに「主人」が使っている。しかしそれは犬に対しての言葉であり、「奴才」に対するものではない。「奴才」に対してはやはり「主子」が用いられている。翻訳にかんする私の意見はこのぐらいにして、魯迅の文章の削除された個所にもどる。「正月」の「反動分子」は魯迅一流の敵の用語をそのまま用いて敵にお返しする方法であるから、こういう用法が敵を激怒せしめ削除させたことは言をまたない。後の「神を迎える

ことと人を咬むこと」の「人を一年中悲憤させ、労働せざる英雄たち」とはむろん蔣介石を頭とする国民政府の権力集団及びその手先たちを指す。かれらは日本の侵略に対して徒らに口に抗戦をと見え、実際は投降政策をとっていた「奴才」であった。かれらはこの魯迅の文章によって心臓に七首を投げつけられたも同然なのだ。かれらは切齒扼腕し文章の相関性もへったくれもなく一刀両断のもとに「奴隸の文章」を斬って捨てたのである。こうして、日本では削除の個所を××で示すのに「中国では空白を許さず必ず続けておくから読者の眼には完全な文章のようにうつり、ただ作者が意味のわからない、おかしいことをいっているようにみえる。この種の支離滅裂なことをいって読者の前に現われるもののなかにはフリーチェやルナチャルスキーですら入らざるをえないのである。」（「中国文壇上の幽霊」,「且介亭雜文」）ということになったのである。

「花邊文学」六十二篇のうち削除をうけたもの三篇という結果からみれば魯迅の検閲の網の目をくぐる手腕も大成功とっていい。しかし、また曲筆なるがゆえに読者に真意を伝ええぬ恐れある文章もある。たとえば「倒提」（逆さにさげる）がそうである。この雜文は、外国帝国主義の圧迫下にある中国人も、組織され反抗すればその運命は必ずしも厨房に送りこまれて西洋人の会席料理にされると限ったものではないことを訴えているものである。しかし文章の始めのほうをみれば筆者がいかにも帝国主義者を弁護しており、外国人の利害のため立ち働らく買弁のようにみえる。

また「南腔北調集」の「中国の女の足から中国人の中庸でないことを推定し、さらにそれより孔子が胃病だったことを推定する」——「学匪」派考古学の——というおそろしく長い題の雜文も誤解されたり真意をくみとりにくい個所がある。この文章は一見すると纏足の考古学を論じているようにみせている。だがここでも魯迅はその偽装をとおして現実の諸問題を論じているのである。次の文章をみよう。

「ところで甚だ不思議なことには、なぜか知らぬが、（自ら按ずるに、こ

こはいささか学者的態度を失っているようだが), 女士たちは足に対して, 尖らすだけではまだ足らず, 更にこれに強制して「小さく」させはじめ, 最高の模範として, 三寸を基準にするに至ったのである。こうすれば, 利履りしと先の四角い履との二通り買う必要はなく, 経済的な見地からすれば, 悪いとはいえないが, 衛生的な見地からすれば, いささか「行き過ぎ」なるを免れず, 言葉を換えていえば, つまり「極端に走って」いる。」と纏足論をくりひろげながらひょいと核心に入ってゆく。

「わが中華民族はつねに自ら「中庸」を愛し, 「中庸」を行なう人民をもって任じているが, 実は頗る過激なところが多いようである。たとえば敵に対する場合でもそうだ。時には圧服しただけでは足らず, 更に「悪を除いて尽さんことを務め」るし, 殺してしまうだけでは足らず, 更に「肉を食い皮に寝」ようとする。ところがまた時には「侵略者がはいて来るなら, いくらでもはいて来させるがよい。彼らは十万の中国人を殺すかも知れぬ。大したことはない。中国人はいくらでもいるのだから, 我々は更に人間をくり出すまでだ」(当時日本軍の侵略に対して, 一面抵抗, 一面平和を主張した国民党の説) というまでに謙虚なこともある。これは本当に馬鹿なのか, それとも馬鹿作りをしているのか, 我々には全く見当がつかかねる。しかして女の足は特にその一つの鉄証である。……」(魯迅選集, 第9巻, 73-74頁, 岩波書店)

前にも訳文のことで一言したついでに, この訳文についてもいうことがある。73頁の下段終りから2行目の「多いようである」は「多いのだ」である。原文が「其实是頗不免于過激的」とある以上, 「実は過激すぎるが多いのだ」(青木文庫, 魯迅選集, 雑感集3, 51頁) のほうが正しい, 「的」で断定しているのであって, 「ようである」とはならない。また岩波版74頁の「これは本当に馬鹿なのか, それとも馬鹿作りをしているのか, 」というのは全く見当がつかかねる。原文は「這真教人会猜不出是真癡還是假呆」だから「馬鹿作り」というのは見当ちがいではないのか。青木文庫版の「こう

なると、まったく、本当に痴呆なのか、馬鹿を装っているのか見当がつかなくなる」(51頁)のほうが正しい。

とにかく翻訳についてはそれまでとして、この文章は女の足の考古学にことよせ、また孔子の中庸論でごまかしながら、国民党の「無抵抗」と日本軍の侵略を暴露しているわけだが、それだけにとどまらない。判りにくいのはその後の文章である。魯迅はどうして孔子の胃病だったことを証明するため、この研究をしているのかということである。孔子の胃病にかんする行は多いが、それは胃病の研究を目的としたものであろうか。そうではあるまい。大体この雑文の真の目的は国民党、日本の軍事侵略、それにアメリカ帝国主義の経済的侵略をあばくのを目的にしている。それは魯迅雑文にしばしば「花旗」(星条旗のこと——筆者)という言葉が出てくること、更に「故事新編」の「理水」などからみても「花旗」がアメリカ帝国主義の象徴として用いられていることは明らかである。「かりにこういったとする。家にばかりいて、あまり出歩かぬ人々ならば胃病にかかり易いであろうが、孔子は諸国を歴遊し、王公に運動して廻ったのだから、病気にかからずすんだはずだと。それこそ今を知りて古を知らぬ錯誤を犯している。けだし、当時はまだメリケン粉は輸入されておらず、本国製の麦粉には、砂が沢山まじっていたから、目方が今日の粉より重かった。……胃は墜下して大きくなり、消化力はそれと共に減少して、しょっちゅう痛んだらう。」この文章を読めばアメリカ製の小麦粉が美味で衛生的で健康によいためその輸入は中国人民に幸福をもたらし胃病を少なくさせたように見える。つまり魯迅はアメリカ製小麦粉の輸入を歓迎しているかのようだ。ところが実際はちがう、1933年国民政府がアメリカと結んだ綿麦借款は中国経済にとって破滅的だったと同時に蒋介石を頭とする蔣宋孔陳の四大家族に人民を犠牲にした上で大儲けをさせたのであるから、事実は全く反対である。魯迅は偽装の手法を使いながらちょっぴりと「花旗」つまり星条旗をもってアメリカ帝国主義をのぞかしているのだ。だからこの「花旗」という一語はこのばあい重要な役割を果し

ているわけで、この言葉を訳さずにただ「メリケン粉」と訳している岩波版魯迅選集は重大な錯誤を犯している。メリケンはアメリカンの意味だからアメリカを入れなくてもよいという議論はなりたたない、アメリカを入れなくてはこの文章の意味はなくなってしまうのである。その点青木文庫本は「花旗の」となっている。岩波版は「日本語による唯一の定本であり、最大の魯迅集である」そうである。唯一の定本とは改悪本のことか。必要な個所を引用しただけでもこれだけ誤訳がある。仔細にしらべたらもっとあるかもしれない。「唯一の定本」にこれほど誤りが多いのに気づけなかった日本の中国語学者、中国文学者は迂闊だった。それとも知っていながら知らない素振りをしていただけか。とにかくわれわれの責任は免れがたい。翻訳についてはついでだからロシア語訳本もしらべてみたら、「アメリカの」となっている。こうなると「日本語による唯一の定本」は「ロシア語による唯一の定本」にも劣ることになるだろう。なぜならそれは単に一字一句の問題ではなく、また日本語として美文であるかどうかの問題でもない、それは魯迅の読み方の問題であり、解釈のしかたの問題であり、魯迅にたいする姿勢の問題にかかわってくるからだ。

以上のような次第で魯迅の文章は敵にも味方にも誤解をまねきやすい所がある。ところで本題の検閲の暴露にもどろう。メリケン粉の次にはこんな文章がある。

「三月一日『大晩報』(上海の新聞)に載った記事にいう、「孫総理夫人<sup>スン</sup>宋慶齡女士は帰国後、上海に住んで以来、政治方面に関しては一切関与しなくなつたが、ただ社会団体の組織については非常に熱心である。本紙の記者が得たニュースによれば、一昨日郵便局を通じて宋女士あてに強請の信<sup>スン</sup>□(自ら按ずるに、原文一字欠く)を送ったものがあり、すでに本市当局より郵便局検閲所の検閲官を派遣して取調を行ない、直ちに強請の手紙を押収して、市政府に報告した。」これを読んでも、総理未亡人宋女士の信書といえども、常に郵便局で当局から派遣された役人によって検閲されていると推定



するのは、絶対に禁物である。」

この翻訳でも「強請の信□（自ら按ずるに、原文一字欠く）」の次に「通」が入るのではなからうか。原文は「致宋女士之索詐信□（自按：原缺）件、……」とある。「信」は手紙、書信だから強請の手紙或いは青木文庫版のように強迫状とすべきだろう。強迫状何通の意味と解すべきである。またただの「信」では日本語になるまい。ここにも国民党の検閲の暴露があるが、うっかりすると見過してしまふ。

更に検閲の暴露の例として「夢の話なきく」がある。これはフロイトの夢の分析を語りながら言論の抑圧について語っているもので、「東方雑誌」の「新年の夢想」欄の批評である。この欄には百四十余人の回答がよせられたが、その問いというのは、「夢にみる未来の中国」と「個人生活」であった。これにこたえたインテリの多くは、生活の不安定を感じ、将来のよりよき社会を夢想したが軌道はずれで、実現不可能である。魯迅によると、「一見どんなに載道であっても、将来のよき社会のため「宣伝」する意思はもっていない。」だから「そうした社会を建設する以前の階級闘争、白色テロ、爆破、虐殺、鼻の中に唐辛子水を注ぎ込むこと、電気椅子……を夢みた人は非常に少なかった。」魯迅選集、第9巻、46頁、岩波書店）のである。しかし「この「夢」の世界を実現させようと思っている人はいるのだ。彼らは口に出して言わないで、実行する。将来を夢みながら、そうした将来に到達するための現在に力を尽している。」と暗に中国共産党や紅軍を指している。ところでここで大事なのは、「宣伝」する意思さえない「空っぽの夢」でさえ検閲によって削除されていることだ。この文章の冒頭の「夢をみるのは、自由だが、夢の話となると不自由だ。夢をみるのは、ほんとの夢を見るのだが、夢の話となると、嘘になりかねない。」という言葉は検閲官による検閲以前の筆者自身による検閲(?)を指すものではないか。また編集者は編集者なりに「言論が不自由だから、夢の話でもした方がました、そして真実と称する嘘を語るよりも、夢の真実を語った方がましたと考えたのにちがいな

い。」ところが「単に夢を見るだけなら大したことはないが、それを話したり、質問したり、分析したりすると、タダではすまなくなる。編集者はそこまで考えていなかった。そこで出会い頭に資本家とぶつかり朱筆を入れられたわけだ。」このように当時の中国の検閲機構をあばきだしている。つまり筆者、編集者、検閲官の三段階による削除の過程を暴露しているのである。

ここに引用した訳文にも疑問の個所がある、「爆破」という訳語が出てくるが、原文は「轟炸」である、だから「爆撃」というべきだろう、「爆撃」をなぜして「爆破」といいかえねばならないのか。そうせねばならない文学的必要性でもあったのか。中国語の教師であって中国文学者でない私にはその辺の理由がわからない。もっとも「轟炸」を「爆破」と訳しているのは岩波版魯迅選集だけではなく、青木文庫本も同じである。これで見ると、岩波版は青木文庫版と誤ちは同じうして正しいのを改悪しているようにみえる。「爆破」でなく「爆撃」でなければならぬ理由は「轟炸」という中国語の語義ばかりによるのではない。国民党の権力者は日本軍の侵略には無抵抗でありながら国内の少数民族や共産党にたいしては猛威を逞しうしていたのだから、日本軍の進攻には反撃しなくても、共産党の支配する地域つまり解放区（国民政府からみれば匪賊地区）は無差別爆撃して人民を殺傷していたのである。だから「階級闘争、白色テロ、爆撃、虐殺、……」とならねば、その後につづく「口に出して言わないで、実行する」人々つまり中国共産党や紅軍との対比の妙をなさないはずであり、魯迅の意図に反することになるだろう。

次に国民党治下における中国の監獄と酷刑の暴露に移ろう。

魯迅は1930年代から監獄や禁錮、酷刑、殺戮などの問題の暴露をはじめているが、監獄を題にした雑文は「中国の監獄について」である。この文章は日本の雑誌「改造」に日本語でのせたものだが、やはりひねくれた書きぶりである。宋清の文明の発展から筆をおこして監獄の進歩発展を論じ、

表面は穩健そうに見える。だがここでも魯迅は監獄で行なわれる暴力と拷問を明るみに引き出している。清がフランスに敗れてからは造兵工場を建てるようになり、日清戦争に敗れてからは学校をたてるようになった。ところが学生は今の日本のように年々騒動をおこすようになったので、清朝が倒れて以後国民党が政権を握ってからは、その誤りを悟って、大いに監獄をつくるよりほか方法はなくなった。こういう前書きから（「今の日本のように」と魯迅はっていない）本題に入って、中国の監獄の文明式な進歩を跡づけ、現在の国民党支配下の仁政による監獄の進歩完成ぶりを語りながら、その欠陥に眼を向けている。新らしい監獄が旧式の仏教を手本とした地獄的なものとはちがうとはいいいながらも、ヨーロッパのそれとは本質的に異なることをニューラン夫妻の絶食で暴露している。ニューラン夫妻は欧米なみに絶食で抗議したところ、一向に効果をあげられなかった。「自分からたべないのだから、ほかの者と何のかかわりがあるろう？ 仁政とは無関係のみならず、食糧節約になり監獄にとってはもうけものである。ガンジーのお箱も所をまちがえると一向に効き目はなくなるのだ。」旧式の監獄が禁錮するだけでなく地獄の苦しみを味あわせるにとどまらず、親類縁者から搾り取って貧乏にしたのに対比して、新らしい文明式監獄では洗面、入浴をゆるし、御飯の量も割引してはならんという命令も出す位だから大した仁政で囚人は幸福だ、と魯迅はいう。しかも一年に一回は家へ帰して性の問題を解決させてやるべしという人道的なお役人もあった。「世帯も許すとしたら今のような洪水、饑饉、戦争、テロの時でなくても転居願を出す人々は決してないともかぎらない。そこで虐待は必要となるのである。」新らしく進歩した文明式の監獄の裏側に虐待の存在を示した魯迅は最後に仁政ある国民党の監獄の真の姿を暴露する。「しかし、こんなに完璧に近い監獄にもまだ欠点はある。今まで思想上のことに對してはあまり気をつけないできた。」とその思想的側面に眼をむけ、かれらが「反省院」という特殊監獄をつくって共産主義者を教育している事実を暴露する。すなわち、「私はまだその中に入って反省したこと

はないから詳しいことは知らないが、とにかく囚人に時折三民主義を聞かして、自分の誤りを反省させているらしい。そのうえ共産主義排撃の論文も書かねばならないという。もし書きたくなく、或いは書けなかったなら一生反省しなければならないが、書いても満足なものでなければやはり死ぬまで反省しなければならない。今のところ、入るものもあれば出るものもあるが、反省院をもっと建てるそうだからやはり入る方が多いのだろう。出て来た試験ずみの良民には稀に会うこともあるが、大抵は萎れていて、恐らくは反省と卒業論文に力を使い果したのであろう。その前途は無望の方である。」

この文章ではいわゆる狭い意味での曲筆を用いずに拷問や監獄をあげているとはいっても、国民党の残虐な拷問については直接ふれていない。それを直接あげけるような時勢ではなかったが、それでもあらゆる方法をつくり、それを成しとげようとはしている。そのため魯迅は歴史を重視し、日本や中国の拷問を具体的に記し、それからかれの時代の中国の拷問を明るみに出している。それをわれわれは「電気の利害」、「病後雑談」、「深夜にしるす」などにみることができる。日本の徳川幕府時代におけるキリシタン拷問のさまを「切利支丹殉教記」からとって、教徒を温泉の傍へひきたて熱湯を全身にかけたり、周囲に火を燃やしてじっくりと火あぶりにして虐殺する。それから中国に移り、唐代小説から例をとって、周囲に火をたいてあぶり、喉がかわくと醤油や酢をのませる。これを魯迅は日本よりも一步進んだ方法だといい、「現在お役所で容疑者を拷問するのに、唐がらしを煎じてその汁を鼻孔に注ぎこむのがある、これは唐代から伝っている方法らしいが、古今の英雄の見るところは同じとみえる。」こうして現代の英雄は反省院において共産黨員及びその容疑者の鼻から唐がらし汁を注ぎこんで肺の中まで流れこませては、不治の症状に致らしめる。

さらには電気刑具により失神させ、蘇生するとまた刑具をかける、これを七八回やられるとたとい死を免れえても齒はぐらぐら、神経も鈍くなって元通りにはなれない。この「電気の利害」以前でも魯迅雑文のあちこちには

歴史的な事実を借りて国民党の拷問虐殺を諷するものはあるが、魯迅がこれ以後ますます執念深いほどこのテーマを書きつづけてゆくことは、「且介亭雜文」を見れば明らかで、正にそれこそ国民党の言論抑圧、出版物の削除、発禁、没収、検閲、拷問、虐殺等々の暴露の集大成とみなしてもよいぐらいである。

魯迅が「且介亭雜文」において曲筆を用いながら国民党の暴虐を暴露している一つの方法はいわゆる借古諷今の中国の伝統的な筆法である。これはまず第一に「病後雜談」及び「病後雜談の余」にあらわれる。そしてこれまた例によって短刀直入本題に入ることをせず、一通り廻り道をする。つまり本題の「野史」研究をとおし、明清をもって現在の国民党を諷刺し暴露するという本題の前に、病気にかかるのは一種の幸福だ、しかしそれは命に別条なく、多少金をもっていることが俗人たらずして雅人たるの条件なりといったことから、本を読むことを思いたち、曲折を経て、ついに明末清初の野史に辿りつく。しかしこの雜文は最初の五分の一をのこして他の五分の四は有能な検閲官により削除の斧鉞を加えられ、野史にたどりつく前の個所で斬られてしまった。つまり魯迅の曲筆もこのばあいは失敗に終わったことになる。検閲の網の目をくぐれなかっただけに氣迫溢れるものであり、晩年の力作であって、「電氣の利害」などの到底及びあたわぬものとなっている。増田渉先生あて魯迅の書簡には「病後雜談」にかんしこう書いてある。

「私は時々雑誌などに書きますが、検査官に消されて滅茶々々。支那には日本と違って検査してから印刷に付すのです。来年からはこの検査官らと一戦しようかと思つて居ます。」一九三四年十二月二十九日（魯迅の印象、増田渉著、182頁、ミリオンブックス）

「二月号には僕の「病後雜談」が出るはずで、それは原文の五分の一、あとの五分の四は皆な検査官に消されたのです。つまり拙作の首です。」一九三五年一月二九五日夜（同上、183頁）

「三月号の「文学」に又私のものを一つ出します。矢張り大にけされまし

たが併し二月号の様にひどくはない。夏頃になったらけされた文句を皆な入れて一冊の何とか集を出そうかと思って居ます。」一九三五年二月二十七日(同上, 186頁)

「文学」三月号に出された拙文も大に刪削されて居る。つまり今の国民党の遺方は満洲朝(清朝)とそう違はない, 或は満洲人もあの時漢人からこんな方法を教へ(ラレ)たのかも知れない。去年六月以来, 出版物に対する圧迫は段々ひどくなり, 出版屋も大に困って居り(ル)。新らしい青年作家の創作に対する圧迫が殊にひどく関係あるの所を全くけされて, カラだけ残こる事屢々あり, こんな有様をくわしく, わからなければ, 日本で「中国文学」を研究する事は随分隔膜に(ヲ)免れないだろう。つまり私達は皆な桎梏をはめてダンスをやって居るのだ。

併し私は近い内に去年の雑文をあつめて, けされた処, 禁止されたものを皆な入れて出版するつもりです。」一九三五年四月五日(同上, 189頁)

以上の書簡によってわかるように「病後雑談」も「病後雑談の余」も滅茶苦茶な削除をうけたが, それをうめてまたも出そうとしているし, さらに「来年は一戦しよう」と執念をもやしている。そして輝かしい雑文のひとつ「深夜にしろす」を死ぬ年の1936年に書いて最後の息をひきとるまで国民党の弾圧と暴虐をあばきつづけたのだった。「病後雑談」と「病後雑談の余」は明末清初の野史「蜀碧」, 「蜀亀鑑」, 「安竜逸史」, 「翁山文外」, 「聞漁間録」, 「立齋間録」, 「永楽実録」などの容易に入手しがたい禁書に載るところの皇帝その他政治の権力者の拷問, 殺戮の残酷さ, 禁書, 改ざんぶりを詳細に述べ, 官製の欽定歴史がいかにかに真実を歪曲しているか, したがって正しい歴史を知るためには「明人, 清人あるいは今人の野史なり筆記」を読むこと, これを遺言のひとつにしている。紙数も限りあるので, この雑文の内容を仔細に検討する余裕はないが, 一言にしていえば中国酷刑史略とでもいうものである。周漢時代の宮刑, 幽閉, 明の永楽帝の皮剥ぎの刑, 清朝の滅族, 凌遲などにわたり, 「医学と残酷な刑罰とは, どちらも生理学と解剖学

の知識を必要とする。ところで中国は実に不思議な国である。固有の医書にある人体五臓の図は、まったくいい加減な間違いだらけで、見られたものではないのに、残虐な刑罰の方法となると、古人はとうの昔に現代の科学を知っていたのかと思われることが往々にしてある。」(魯迅選集、第十一卷、102頁、岩波書店) といって、歴代の権力者の(国民党の権力集団をも含めることはむろんである)酷刑に対する科学的知識の豊富さを揶揄している。ところでこれらの雑文が読者に訴える溢れるばかりの気力の充実さ気迫の鋭さはいったい何処からくるか、そのよって来る所以について一言しよう。詮じつめていえばこれが魯迅の遺書の一部をなしているということから来ているのである。少なくとも1934年代の魯迅の心底には死の予想があった。それは「且介亭雑文」においてその他の雑文集よりもずっと多く死という言葉が出てくるばかりではない。五十才をすでにこして、しかも西洋人ならば五年前に死んでいるという医者診断をきかされていた魯迅は、社交辞令や弱味をみせて敵を喜ばせないために死を語るばあいも冗談にまぎらわせている。現に「病後雑談」の最後には「これを書いている時、病気はまあ好くなって、遺書を書く必要はない。」といている。だがこれはそのまま受けとれない。また友人への書簡にも、たとえば増田先生宛のものを見ても、病気は大したことがないように書いてある。いずれも本音ではない、その理由は前述のとおりである。魯迅の書いたもののうち最も遺書らしいのは「死」であるが、それにはこういう文章がある。「最近十年の間に友人の死のため文章を書いたことはあるが、自分のことは全く考えなかったようだ。この二年来病気をすることが特に多く、病気になるとそれがわりと長い。そういうことから年令を思うことしばしばである。むろん他面では或る作者たちの好感、或いは悪意の筆によるサジェスションもあるが。」それで「早く仕事をしなければ」という考えになり、「今年の大病ではじめてはっきりと死の予想がおきた」のである。そればかりではない。死後の肉体の処理まで心配しているのである。「莊生(莊子)は「上にあっては鳥鳶に食われ、下にあっては

蝮蛇（けらと蟻）に食わる」，死後の身体は，どうなろうとかまったことではない，どのみち，結果は同じなのだから，と考えた。

私は，それほど闊達にはなれない。かりに私の血や肉を動物に食わせなければならぬとしたら，どうか獅子や虎や鷹はやぶさや隼はやぶさに食わせたい。かさかき犬どもには，一片たりともやりたくない。」（魯迅選集，第十二卷，81-82頁，岩波書店）またこうもいっている，「毒なきは丈夫にあらず，これを筆墨にあらわすは小毒のみ。最高の輕蔑は沈黙である，しかも眼玉ひとつすら動かさずに。」（半夏小集八）これらをよく読みあわせてみると，魯迅の心中にある矛盾を発見できるだろう。最高の輕蔑が沈黙ならば，輕蔑この上なしのハエや狢ころやかさかき犬などには見向きもしなくて差支えなきそうなものだが，実際は激しい憎悪と蔑視，それに斗争心をもってかれらに立ち向っている。そして敵は一人たりとも赦しはしない，死んでも赦さぬぞ，といっている。魯迅は沈黙の輕蔑黙殺は事実上敵に何の痛癢もあたえ得ず，敵を喜ばすことはできても打撃をあたえることができないことをよく知っていた。だからかれは戦いつづけて書かぬばならぬ，病気で書けないか，或いは永遠に書けなくなること，つまり死，沈黙して眼玉ひとつ動かせなくなった時，その時のことも予測して死んでも戦いをやめないといっているのだ。つまり「半夏小集」の八は死を予期して死後の戦いを述べているのである。魯迅心底の矛盾はこう解くべきではなかろうか。魯迅晩年の雜文はこういう気持で書かれている，「病後雜談」の迫力も故なしとししない。

最後に酷刑暴露に有終の慘(?)をそえる「深夜にしるす」が残っている。本篇は本来“The Voice of China”という英文雑誌に発表してから1935年5月の「夜鶯」第1巻第3期に中国語で発表したといわれる。英文雑誌にのせたぐらいだから狭義の曲筆はない。だから国民党が共産黨員とその容疑者を拷問する酷刑が大胆に書いてある。一例をあげると，「単に刑罰のみでも，今日の中国には，実にいろいろなものがあるということを，私ははじめて知りました。第一は籐の鞭，第二は虎の腰掛け，これはいずれも軽い



方です。第三は棒踏み、これは犯人を跪かせて、鉄の棒をその膝の内側へ載せ、その両端に大の男が乗るのです。最初は二人ですが、だんだん人数を増して八人にします。第四は焼け鎖。これは真赤に焼いた鉄の鎖を地面に敷いて、その上に犯人を跪かせるのです。第五に、もう一つ「喰らわし」というのがあります。これは鼻から唐辛子水、石油、酢、焼酎……などを注ぎこむのです。さらに、第六に、犯人を後手に縛り、別に細い麻縄で両手の親指を縛って、高く吊し上げて殴るのがありますが、この刑罰の名は何というのか、私は知りません。

私が、もっとも悲惨だと思ったのは、やはり拘置所で私と同房だった一人の若い農民のことです。おえら方は、彼を赤軍の軍司令官だといって頑張りましたが、彼はあくまで承認しませんでした。そこで、ああ、とうとう彼らは針を彼の指の爪の間へ挿しこみ、金槌で打ちこみました。それでも承認しないので、また次の指に打ちこみ……また次の指に……そしてついに、十本の指に全部打ちこんでしまいました。今なお、あの青年の蒼白な顔、落ち込んだ目、二本の血まみれの手が、常に眼前にちらつき、どうにも忘れることができず、私を苦しめるのです！……」（魯迅選集、第十二巻、18-19頁、岩波書店）

これは魯迅の酷刑暴露のしめくくりである。というのはこの「深夜にするす」において、かれは「成功せる帝王」つまり猛威をふるっている政治の権力者の滅びゆく運命をも予言しているからである。

以上にみてきたところによると、魯迅は一見被虐症で露出癖のある精神異常者のようにみえないこともない。しかしその異常ともみえる執拗な暴露の目的は明らかである。かれの訴えるものが国民党の暴露にあることはいうをまたぬ。このことだけ疑いない、だが単に国民党の暴露のみに終わっているのか、いや、そうではあるまい、国民党や蔣介石をとおしてあらゆる独裁者を暴露しているのである。ちょうど「阿Q正伝」において阿Qという一農民を描くことにより中国人の典型を創りだしたように、また独裁者の反面は奴

隷であるという普遍的真理を生々と訴えるために孫浩やヒットラーや蔣介石その他を槍玉にあげているのである。単に国民党の暴露のみに終るものならば、それは個別的で特殊なものにとどまっているにすぎない。しかしわれわれはこの個別的で特殊なものに普遍的で一般的なものを見出さねばならないのだ。それが魯迅の文章であり曲筆なのである。かれの書くものは思想性ゆたかである。だがその言わんとすることを論文のように綿密詳細に分析的に最大漏らさず書きつくす態の文章ではなく、いわゆる曲筆なるが故に、往々にして誤解を生じ真意を誤り伝える可能性が大いにあるし、解釈に分歧を来す惧れもあるという欠陥をもっている。したがって監獄や拷問や酷刑の暴露のうち、ただ国民党の暴露をみることもできるし、あらゆる独裁者の暴露をみてもよい。マルクス・レーニン主義者、毛沢東思想の仰奉者はこの段階にとどまっている。中国、ソ連などの魯迅研究家はいずれもそうである。しかし、もっと拡大解釈することもできるはずだ。つまり、この世に政治というものが行なわれ、一方に支配するもの他方に支配されるものがあるところでは、必ず権力が威力を発揮するだろうし、権力の座にあるものはその地位の永久化を欲するから、敵対者には残酷な鎮圧をもって対する。それは封建社会、資本主義社会、或いは社会主義社会たるをとわず、多少は内容形式に違いはあろうとも変りあるまい。国家が暴力の機関である以上、政治は本質上常に暴力であるという真理、それを魯迅は訴えているとみることでできるのである。むろん魯迅はそれまではっきりとはいっていない、解釈は読むものにまかせているのである。だがそれを暗示するようなものはある、「同意と解釈」で魯迅はこういっている、「上司の行動には部下の同意を必要としない」、「最も肝要なのはなんといっても「武力」であって、理論ではない。」このばあいの「上司」と「部下」という言葉を魯迅が支配者と被支配者の同義語として用いていることは「同意と解釈」の全文を読めばわかるはずで、この雑文の四分の一以上を占める最後の個所は巨大な権力をもつ政府を論じて検閲官の削除をくらっているのである。ところがマルクス・レーニ

ン主義者（毛沢東思想の信奉者も含む）がこの雑文のもつ意味を国民党の暴露にのみとどめているのはおかしい。この雑文も内容はよいが、曲筆たるが故に誤解を招く標本みたいなものである。

以上雑駁で尻切れとんぼの感を免れないし、論文の体裁もなさないが、紙数の関係もあり一応ケリをつける。ここでは魯迅が曲筆を駆使して国民党権力の検閲、拷問、監獄をあばきだした雑文にかぎりその他にはふれなかった。岩波版魯迅選集を引用したさいに発見した誤訳についても、ついでに一言した。魯迅からの引用文中括弧して岩波書店、青木文庫版としたもの以外には、私が原文から適当に訳したものもある。

一九六六年十月十九日

